

ともしび

9 月 号

信心と念仏

伊 藤 益

(筑波大学人文社会系教授)

はじめに

皆さま、こんばんは。筑波大学の伊藤益と申します。本日は「信心と念仏」という講題で、これから思いに任せてお話しさせていただきます。正確な話、正しい教えは、皆さまが通われている各お寺のご住職方がご存じですので、詳しいことはそのご住職方にお聞きいただければと思います。それでは、よろしくお願いいたします。昨日まで、ローマ教皇が来日されていました。それにちなんでというわけではありませんが、まずアウグステイヌス(三五四〜四三〇)という西洋古代末期の宗教思想家を取り上げ、彼における信仰ということを考えたいと思います。

アウグステイヌスについてはご存じの方も多と思いますが、紀元三五四年に帝政ローマ領北アフリカのヌミディア州タガステというところに生まれました。最初はキリスト教徒ではなかったのですが、三十二歳のときにキリスト教に回心しました。その後、司祭から司教、大司教という修道を歩みました。やがて四三〇年に、ヒッポ・レグワスの街全体がヴァンダル族に包囲されているさなか、その街の教会で亡くなりました。

この方は、放蕩の限りの青春を経てキリスト教に入信した人物として大変著名なのですが、わたしが専門としている哲学の分野におきましては、キリスト教をプラトニズムに基づいて体系化した最初の思想家としてキリスト教史上にはさんぜんと輝く人物なのです。そのため聖人せいじんに列せられておりまして、キリスト教徒の方々には「アウグステイヌス」などと呼び捨てにはしません。「セイント・アウグステイヌス」、「聖アウグステイヌス」と呼ばなければならない方であるわけです。

アウグスティヌスの『告白』

アウグスティヌスは、若い頃に放蕩三昧をしたと言っています。紀元四〇〇年に『Confessiones』という本を書いており、これは古くは『懺悔録』と訳されていましたが、現在ではだいたい『告白』と訳されています(『告白(上・下)』服部英二郎訳、岩波文庫、一九七六年)。アウグスティヌスが四十六歳の頃の作品で、自分の前半生、特にキリスト教に入信するまでの経緯について詳しく書いてあります。しかし、どのような悪事を行ったのかと思つてこの本を読みますと、実はあまり大した悪事はしていません。『告白』の中でアウグスティヌスの罪とされていることは、二つしかありません。

一つ目は、帝政ローマ領北アフリカのヌミディア州タガステという街にいた頃の事です。アウグスティヌスは富裕な地主の家に生まれており、何不自由ない生活をしていました。それなのに、十六歳の時に友人たちとかたからつて、付近の農園から梨の実を大量に盗み出しました。これがまず悪行であるというふうに本人は言っているのです。

飢えていた、あるいは渴いでいた、お金がなかった、そういう状況の中で泥棒をしたのであれば、それは許されるのかもしれない。しかし、自分たちは飢えていたわけでも、渴いでいたわけでもなく、お金もたくさん持っていたにもかかわらず、ただスリルを求めて泥棒をした。そのことを生涯ずっと悔いているのです。わたしにも似たような経験がありますが、これほど悩むべきことなのかという不思議な感覚があります。アウグスティヌスはそういう人なのです。

アウグスティヌスが犯したと言っている罪は、あと一つしかありません。梨を盗んだ翌年、十七歳の頃にアウグスティヌスは当時の

文化都市であったカルタゴに遊学します。そのカルタゴで正規の結婚ができない女性と知り合いました。正規の結婚というのは、当時のローマ市民はローマ市民としか結婚することが出来ませんでした。アウグスティヌスはローマ市民でしたが、相手の女性はそうではなかったでしょう。年齢もアウグスティヌスより一つか二つぐらい年上だったようですが、その女性と出会い、同棲生活に入りました。そのことを生涯彼は悔いているのです。

アウグスティヌスは十七歳で彼女と同棲生活を始めて、その関係は十数年間続きました。その間に「アデオダートゥス」という名の息子を授かっています。

振り返つて、現代のわたしの周りにいる若い学生たちを見てみると、恋愛の事で大騒ぎしております。十数年どころか、二、三ヵ月も一緒にいないケースがとて多くあります。それに対してアウグスティヌスは十数年間にわたつて、一人の女性を愛し続けました。立派なこと、自慢できることとまでは言えないでしょうが、どこが恥ずかしいことなのかわたしには分かりません。

アウグスティヌスは真面目なあまり、自分の二つの小さな罪を一生涯引きずつて、深く反省し続けた人間だったと言つてよいでしょう。

ただ、アウグスティヌスの『告白(Confessiones)』には奇妙な点があります。どこが奇妙かと申しますと、Confessionesというのはconfiteri(懺悔)のことを言います。confiteriというのは、神に向かつて告白し懺悔するということです。しかし、キリスト教の神というのは、唯一絶対、全知全能、至善の神なのです。だから、アウグスティヌスがconfiteri、告白などということをしなくても神は全てをご存じのはずなのです。そうであるのに、なぜアウグスティヌスは告白しなくてはいけないのか、という疑問が当然出てきます。これをめぐつては、

いまだにキリスト教関係の学会では激しい議論があるようです。

純粹受動としての信仰

アウグステイヌスは『告白』の冒頭部分でこういうことを言っています。なお、この訳は、キリスト教関係の専門家ではないわたしが一応こんな風に訳してみたというだけのものです。

主よ、わたしの信仰はあなたを呼び求める。その信仰は、あなたがわたしにお与えくださったものであり、あなたの御子の人性(humanitas)を通じて、あるいはあなたの宣教師の奉仕を介して、あなたがわたしに注ぎ込まれたものだ。

(伊藤益『私訳親鸞』北樹出版、二〇一五年、一三九頁)

ここで「主よ」とあるのは父、すなわち神のことですから、わたしの信仰(fides)は神を呼び求めている、ということですが。しかも、その神を呼び求める信仰は神がわたしにお与えくださったものであって、あなたの御子、すなわちイエス・キリストの人間としての側面、人性(humanitas)を通じて、あるいはあなたの宣教師パウロの奉仕を介して、あなたがわたしに注ぎ込んだものであると言っているのです。

これは非常に重要な主張です。欧米の人は非常に強い自我意識を持っています。彼らは、まず我というものがあって、その我が信心・信仰を獲得するのだと考えていると思うのですが、しかしアウグステイヌスは逆のことを言っています。すなわち信仰、fides、われわれで言えば信心というものは、わたしが自分の力で持つものではない

くて、神から与えられるものなのだと言っているわけです。このアウグステイヌスの信仰というものを図式化しますと、まず神、デウスがいて、神がわたしたちに、すなわち、我に向かって信仰を与えようということになっているのです。

アウグステイヌスの考えでは、われわれ人間というものはどうしようもない悪人です。そして、そういう悪人は無力だと言うのです。こうお話ししますと、悪人だから無力だということはないだろうと反論する人が必ずいます。悪人というものは悪いことをする能力を持つているだろう、人を殺す能力、人のものを盗む能力、人をだます能力など十分な能力を持つていないか、と。しかし、それはおかしいと思います。

人間が悪だということは、善に対してなんら開かれていないということですが。まさに無力なのです。そんな無力な人間が自分の力で信仰を持てるはずはないのです。だから信仰というものは、神から与えられてわれわれが持つものなのだ、とアウグステイヌスは言っているのです。簡単に言うと、信仰というものは絶対他力、あるいは純粹受動というものだと言っているわけです。

その後の思想家を見ても、たとえばアンセルムス(一〇三三―一〇九)やトマス・アキナス(一二二五頃―一二七四)といった中世の神学者・哲学者や、キリスト教のプロテスタント側のルター(一四八三―一五四六)やカルヴァン(一五〇九―一五六四)なども、信仰、fidesというものは神から与えられるものだという考え方を崩さないのです。そうしますと、親鸞聖人(一一七三―一二六二)はどうだったのでしょうか。わたしは、宗教に己の生きざまの全てを懸けた、いわば宗教的実存とも言うべき人々は、みんなアウグステイヌスと同じような考えを持っていたのではないかと推測いたします。

親鸞聖人の信仰

親鸞聖人の言行録とも言うべき、『歎異抄』の第六条を見てみたいと思います。

専修念仏のともがらの、わが弟子ひとの弟子、という相論のそ
うらうらんこと、もつてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人も
もたずそうろう。
(聖典六二八頁)

親鸞聖人は、このごろ念仏門の仲間たちの間で、「あいつはわたしの弟子だ」「こいつはあの男の弟子だ」というような弟子争いがあるようだけれども、それはとんでもない話であると、まずおっしゃっているわけです。道場主たちが弟子を奪いあっているのです。それは一面においては、宗教的威信をかけたものですが、弟子が多ければ多いほど志納の金品も多いわけで、単純にいえばお布施が多いわけで、弟子が多いか少ないかが生活に関わってきますから、現実問題として大変なことだった次第です。にもかかわらず、親鸞聖人はそういう争い事は「もつてのほかの子細」であるとおっしゃっています。この親鸞には弟子なんか一人もいないと言っておられるのです。

そうは言っても、『歎異抄』の第二条には、阿弥陀さまからお釈迦さまへ、お釈迦さまから善導大師へ、善導大師から法然上人へ、法然上人から親鸞聖人へという法統がしっかりと述べられています。また、親鸞聖人は四十数通のお手紙、「御消息」を残しておられます。京都に帰った後に関東の門弟たち、特に常陸国、わたしがいま住んでおります茨城県の人間に向かって教え諭す手紙を書いて

おられるのです。しかも、その手紙が門徒たちの間で回覧されることさえ願っておられません。ですから親鸞聖人には現実問題として弟子がいたことは確かなことです。にもかかわらず、ここで弟子なんか一人もいないとおっしゃるのは、理念的な視点から師弟関係を捉えておられるからでしょう。

『歎異抄』の第六条には、その理由が次のように書いてあります。

そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念仏をもうさせそうら
わばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀の御もよおし
にあずかつて、念仏もうしそうらうひとを、わが弟子ともうす
こと、きわめたる荒涼のことなり。
(聖典六二八頁)

なぜ弟子一人ももたずと言うのかというと、わたしのはからいで念仏を称えさせているのであれば、その人はわたしの弟子であろう。けれども、念仏は弥陀の御もよおしにあずかつてわれわれが称えさせていたでいるものであって、わたしが教えて称えさせているものではないのだと。だから、念仏を称えていらつしやる人を自分の弟子だなんて言うことは極めて荒果れてた、すさまじい話だとおっしゃっているのです。次がさすがは親鸞聖人だと思わせる言葉です。

つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなることのあるをも、師をそむきて、ひとつにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいこと、不可説なり。

(聖典六二八〜六二九頁)

一緒にいる縁があれば、一緒にいるだろうし、離れる縁があれば当然離れていくだろう。それなのに、自分に背いて別の師について念仏したら往生できないなどということは当然言っではいけない、とおっしゃられているわけです。

この言葉は、一介の大学教授であるわたしにも身につまされる言葉です。たとえば、わたしの書いた本を読んで、あるいはわたしの講義を聞いて感動したと言っつて院生がたくさん大学院に入学して来ますと、自分の人生に箔が付くような感じがするわけです。ところが、大学院でわたしは親鸞聖人の『教行信証』や法然上人の『選択集』などを読ませているだけです。一般の院生にはつまらないわけです。そして数年たつと、生命倫理をやりたいたとか、脳神経と倫理の問題をやりたいたなどと言いつつ、わたしのもとを去っていくわけです。そのたびに、親鸞聖人のように「つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなるる」とはなかなか言えない自分を深く恥じ入るといふ次第です。

わたしが最も尊敬している方で、大正末期から昭和中期にかけてこの真宗大谷派で活躍された蜂屋賢喜代(二八八〇〜一九六四)という念仏求道者がおられました。その蜂屋先生が昭和五年(一九三〇)に『歎異鈔講話』という本を出され、その中でこういうことを言われています。

信者でも檀家でもなかなか離さないものです。それほどに教化でもしたいのかというと、そうでもないのですけれども、しかし、すったころんだといつて、もったものは離すまいとします。それは生活を思うからであります。それだからまた檀家のいうことは何でも聞くのです。小言をいいながら無理であつてもず

いぶん聞きます。それは一途に離してもないからであります。

(蜂屋賢喜代著、伊藤益校訂『歎異鈔講話』北樹出版、

二〇一八年、一五三頁)

蜂屋先生のような優れたお坊さんであっても、自分の檀家に去られるということになると、淋しいような悔しいような、そういうお気持ちを持たれたようなのです。しかし、親鸞聖人はその点さつぱりしておられます。

その後が面白いのですが、「ひとにつれて」、自分以外の人間に従つて念仏したら、往生なんかできないと言っているような人に次のように語りかけられています。

如来よりたまわりたる信心を、わがものがおに、とりかえさんともうすにや。かえすがえすもあるべからざることなり。

(聖典六二九頁)

如来から頂戴した信心をまるで自分のものででもあったかのように、取り返そうとでも言うのかとおっしゃっているのです。ここにはつきりと「如来よりたまわりたる信心」という言葉が出てまいります。親鸞聖人においては、まさに如来がわたしに対して信心を与えてくれる、信心というのは絶対他力で、純粹受動で頂戴するものだということなのです。

如来から我へという方向性

このお考えはどうやら親鸞聖人お一人のものではなくて、法然上

人のお考えでもあったようです。「歎異抄」の後序(聖典六三九頁)に次のことが書いてあります。法然上人がまだご存命の頃に、法然上人の門下の勢観房や念仏房といった人々と親鸞聖人の間で御相論が起ったことがありました。

親鸞聖人が「このわたし、善信の信心も法然上人のご信心も同一である」と言われたところ、勢観房や念仏房から「あの偉大なる法然上人のご信心と善信房、お主ごとき者の信心が同じということがあるものか」と異議が出されました。そうすると親鸞聖人は「法然上人のお智慧やご才覚は広大なものであつて、この点に関して同じだと言つたのなら、それはとんでもないひがごとだ。けれども往生の信心においてはまったく違いはない、同じなんだ」と申されたということです。しかし、勢観房や念仏房たちは一向に聞き入れない。そこで源空聖人、すなわち法然上人に決着をつけてもらおうということになって、三人が法然上人のもとに行つたところ、法然上人は言下にこうおっしゃつたといひます。

源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわらせたまひたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまひそうらわじ (聖典六三九頁)

このわたし、源空の信心も如来さまから頂戴している信心である。善信房が頂いておいでの信心も如来さまから頂戴しておられる信心であると。いずれも如来さまから頂戴しているのだから、同じ信心であるはずだと。違う信心を持つている人はこの源空が参上するお浄土にいらつしやることはないんだよと、法然上人はおっしゃつた

わけです。

つまり、法然上人もやはり親鸞聖人と同じく如来から我へという方向性の中で、信心という事態が成立するといふふうにご考へておられるわけなのです。

諸法無我ということ

ここまで話をして終わることができればいいのですが、ただ何人かの名前を並べて、みんな信心の構造は同じだと言つたにすぎません。それでは親鸞聖人の真意を解き明かしたとは言えません。言うのは、親鸞聖人はもちろん真宗の開祖であられるわけでありませけれども、同時に極めて熱心な仏教徒です。つまり、釈尊の教えに極めて忠実な方です。そうしますと、仏教というのは三法印を示さなくてはなりません。三法印というのは、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三つです。

「涅槃寂靜」というのは、悟りの境位に達して、静かな境地におさまることです。

「諸行無常」というのは、もう歴然としていくことです。わたしは、今日も鏡に映る老いた自分の姿を見て呆然としましたが、人間というものは長く生きても百年ぐらいです。七十年、八十年ぐらいでみんないなくなつてしまひます。この建物も今は美しく立派ですけれども、二百年、三百年たつたらぼろぼろになつてしまひます。何もかも、たとえば地球も五十億年、六十億年ぐらい先にはなくなつてしまつていくかもしれませぬ。まさに仏教は正しいことを言つており、一切は無常、諸行無常なのです。

さて、如来から我へという構図を描くうえで困るのが「諸法無我」

です。わたしは専門的な文献学者ではありませんので、自分なりの了解を述べますが、お釈迦さまのお考えでは全てのものは無自性だということが無我だということです。無自性とは、それ自体としての性格がないということです。それ自体としての性格がないということは、端的に言えば実体がないということです。わたしたちはここに我なるものがある、その我が飯を食べて生きていると考えています。しかし、お釈迦さまはそうは考えておられない。お釈迦さまは、一切は無自性であって、実体がないということです。

そうしますと、わたくしどもは今から七百六十年前には親鸞聖人はたしかにご存命であったと信じておりますけれども、お釈迦さまの考えでは親鸞聖人そのもの、実体としての親鸞聖人などというのは、どこにもいないこととなります。ただ、性信房の師匠としての親鸞聖人、恵信尼公の夫としての親鸞聖人、覚信尼公のお父さんとしての親鸞聖人、明法房の師匠としての親鸞聖人というように、何々として、の縁起の中には在りますが、それは実体ではないのです。ここに大変困った問題が起こるのです。何が困るかと言うと、如来は信心を与えてくださっているのに、その受け手である我が無我だということになってしまふ。「如来から我へ」という図式は成立しなくなってくるわけです。

無我に関して、ある宗派ではこう考えるのだと仄聞しております。打坐を繰り返して、座りに座り抜いて、悟りの境地に入れば、本当の主体我、真我というものが現れてくる、と。それが釈尊の言われる無我だということになるのだそうです。つまり、無我とは絶対的主体性のことだと言うのです。そういう打坐に打坐を繰り返して、悟りの境地に入るような方々にとってはそうなのかもしれません。しかし、わたくしども真宗門徒は、この穢土では悟れない罪惡深重・

煩惱熾盛の人間として自分自身をとらえています。そんなわたくしどもには、そういう解釈はできないと思うのです。

もう一つ、妄執や我執といったものを取り去ったのが無我であると言われることもあります。確かに執着がなくなれば無我になれるのかもしれませんが。しかし、果たして我々が我執、煩惱を捨て去ることができのでしょうか。これは少なくともわたくしどもにとっては無理な解釈としか言いようがない。やはり、お釈迦さまご自身が言われるように、わたくしどもは、実体のないからっぽな存在であるがゆえに無我だと考えざるを得ないのです。

そうなってくると、信心を与えようという阿弥陀さまの声がこの宇宙全体に響き渡っているにもかかわらず、よくよく考えたとそれを受け止める「我」がないこととなります。

これは非常に奇妙な現象のように思われます。しかし、なぜ奇妙に思うかと言うと、それはわたくしどもが何十年間も欧米をモデルとする教育を受けてきたことが一因です。欧米では、まずわたしというものがあって、そのわたしが主体となって神を信じるのだ、と考えられています。こういう考え方にいつのまにかなじんでしまったわたくしどもは、ともすれば、わたしを中心に置いて信心の問題をとらえてしまいます。しかし、わたしは、「我」がなくても信心は成立すると思うのです。

信心が顕現する場所としての念仏

ご存じの方も多と思いますが、かつて大谷大学の学長もなさった山口益先生(二八九五〜一九七六)という方がおられました。先生は、近代仏教文献学の泰斗とも申すべき方でした。山口先生は徹底した文献

学者であると同時に真宗寺院のご住職でもありました。その山口先生に『大乘としての浄土』(理想社、一九六三年)という本があります。その中で山口先生は、天親菩薩の浄土について次のことを述べられています。天親菩薩の浄土というのは、どこかに実在する実体的な存在ではないのだと。要するに、浄土とは姿や形があるものではなくて、浄める、浄化(Purification)のはたらきそのものである。妙有(存在)ではなくて、妙用(はたらき)であるとおっしゃっているのです。

わたしは親鸞聖人の浄土も、具象化され、具体化された存在ではなくて、弥陀の無限の光だけがぱつと差してくるような、そういう世界だと思っております。親鸞聖人のお考えも、浄土とは妙用だというふうなものだと思っております。

そして、信心も別に受け手がなくて、妙用としてその辺をふわり、ふわりと漂っていると考えてもおかしくないのではないのでしょうか。信心は誰かのものではないのです。誰のものでもない、それゆえに誰のものでもありうるものとして、中空を漂っているのです。しかし、それでは、あまりに非現実的で話にならないのかもしれないかもしれません。どうやら、この漂っている無人称なる信心が、立ち現れてくる「場所」(コーラー)というものがあるようです。

信心が立ち現れてくる場所、わたしはそれが念仏だと思っております。もちろん、わが宗門では念仏は御恩報謝でなければなりません。しかし、同時に、信心が念仏という場所に現れてくるということが、親鸞聖人の信心観であり、念仏観であったのではないかと考えられます。

親鸞聖人は信心為本という、信心こそ大事だというお立場に立っておられます。だからといって親鸞聖人は生涯を通して、念仏など称えなくていいとは決して言われなかった。あくまでも念仏と信心とは常に一体であると、親鸞聖人はおっしゃったわけです。まさに

この信心が念仏という場所に顕現する。だからこそ、念仏を無視することは絶対にできないということになってくるのです。

親鸞聖人の文献を扱う授業をしていると、次のようなことを言う学生が多くいます。「最近、祖母が亡くなって、実家が浄土真宗だったので、浄土真宗のお葬式をしました。自分に信心があるわけではないけれど、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と言っておきました」と。つまり、こんな全く心がこもらない念仏であっても、その背後に信心があると云えるのでしょうか、と学生が迫ってくるのです。

それに対しては、「それでもいいんだ。口先だけの念仏であっても、称えないよりはいいんだ。なぜならば、念仏の中にはかならず信心が現れてくるのだから」と、わたしは、そういう話をしております。

現世を祈る念仏

お念仏というのは、もちろん信心に貫かれていなければいけない。そうである限りは、基本的にやはり御恩報謝の念仏でなければいけないと思えます。ただ、最後に次のことを述べておきたいと思えます。

たとえば、わたしの妻の母のことですが、西本願寺の蓮如上人の頃から続く大きなお寺の出身でした。その義母は、魚を捌いては「南無阿弥陀仏」、蚊を殺しては「南無阿弥陀仏」、お肉を捌いては「南無阿弥陀仏」と言っていました。それで妻がわたしに「あの念仏はおかしいんじゃないの」と言うのです。わたしは、「確かにお念仏というのは御恩報謝と聞いているけれど、あれは御恩の報謝じゃないよな」と話をしていました。

ところが、わたしは二年半前に心臓の手術をしました。その手術はちよこつと患部を焼き切るだけで、大したことはないと言われて

いたのです。しかしそれは執刀しない循環器内科の教授が言っていたもので、手術は弟子がやると聞きました。弟子と言っても教授ですが、その方が手術の前日に説明に來られて、「場合によつては心臓の壁をばつと突き破るかもしれません。ただし、われわれは外科ではないので、命を奪うところまではやりません」と言うのです。そして「手術は最低でも七時間か、八時間はかかる」と。だんだん恐ろしくなつて、どうしようかと思いましたが、しかたないので恐る恐る承諾書にサインして、翌日手術を受けることになりました。手術室には車椅子で運ばれていくわけですが、その車椅子でわたしは、一所懸命に「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えていました。この念仏はどういうものかというところ、「手術をしてくれてありがとう」ではないわけです。ただ、ひたすらに「生かして下さい、生かして下さい」というお念仏なのです。自分もこうなるのだなあと思つてしまいました。

親鸞聖人はこの念仏をお怒りになるだろうかと思つていました。私はどう考えても、あれだけ優しい親鸞聖人が、こんな念仏はけしからんとおっしゃる筈がないと思つてしまいました。

法然上人の書物に「二百四十五箇條問答」というものがあります。その中であるご門徒が法然上人に、次のように問うのです。

現世をいのり候に、しるしの候はぬ人はいかに候ぞ。

〔昭和重修法然上人全集〕平樂寺書店、一九五五年、六六六頁

現世を祈っているのだけれど、その甲斐もないのはどうすればいいのでしょうか、ということですが。法然上人は、現世を祈つてもいいけれども、できるだけ心を込めてお念仏しなさいとお答えになつ

ておられるのです。

おそらく親鸞聖人は、もし私が「自分の命を助けてくださいの念仏、蚊を殺して申し訳ないの念仏、魚を捌いて申し訳ないという念仏はいけないのでしょうか」とお聞きしても、いけないとは言われない気がします。

親鸞聖人には、「現世利益和讃」という十五首の和讃があります。もちろん、聖人は、念仏が現世利益をもたらす呪文だなどとおっしゃっているのではなく、念仏を称えれば鬼神や諸々の菩薩などが守ってくれると言つておられるにすぎません。念仏をすれば金持ちになれるなどという発想は聖人のお考えにはないことです。ですが、親鸞聖人は、弥陀への信心に裏づけられた念仏ならば、たとえそれが現世を祈るものであつてもよい、というお考えだったのでないでしょうか。念仏によつて、自分の命の無事を祈るといふわたしの態度を、聖人はけつして否定なさらない、とわたしは信じております。ただ、それはもはやわたしのような在家のものが云々すべき問題ではありません。もし皆さま方が疑問に思われた場合には、どうかご近所のお寺さんにお尋ねいただきたいと思つています。お寺というのは、聞法のための場所です。お葬式をしたり、お茶を飲んだりするだけの場所ではありません。あくまでも聞法を通して、自分の内心のいろいろな疑問をご解決いただければ有難いと思つています。ちょうど終了の時刻となりましたので、これで終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございます。

(いとう すずむ)

二〇一九年十一月二十七日
親鸞聖人讃仰講演会抄録



ただ本願を信じ、

念仏を申すこと

教学研究所助手 都 真雄

今年の年頭では考えることもできないことだったが、新型コロナウイルスが世界で流行している。多くの方が亡くなられており、また休業や自粛等によって深刻な経済的被害が生じている。一刻も早い感染拡大の終息が望まれるが、ワクチンは未完成であり、苦しみが多く安心できない日々が続いている。

コロナウイルスがパンデミック(世界的な大流行)を起こしはじめたとき、私が最初に思ったのは、親鸞聖人や蓮如上人、そしてその時代を生きた人々についてだった。親鸞聖人や蓮如上人の時代も、疫病の流行をとまぬ飢饉が度々、起きていた。大きな飢饉でいえば、親鸞聖人ならば、養和、寛喜、正嘉の三度の飢饉、蓮如上人ならば、長祿、寛正の飢饉である。それらの惨状は、様々な文書によって現代に伝えられており、いかに死と隣り合わせの生活であったかが知られる。

当時の人々の死に対する感覚は現代とは異なると思われるが、得体の知れない疫病が蔓延すれば、顕在的あるいは潜在的にさぞ不安を感じながら生活していたことだろう。その先人たちが感じたであろう不安を、今回、コロナウイルスの流行によって、私も自らの身で感ずることになった。同時に、飢饉や疫病が蔓延する状況の中で教えを依り処にして生き抜いた先人たちが多くおられたこと、そうであるからこそ、現代にも教えが伝えられていく、そのことを有難く思った。

また今回、例えばコロナウイルスに感染してから一週間ほどで亡くなる方がおられたことを知って、私自身、無常であることを感じずにはおれなかった。ウイルスに感染すれば、健康な人が急逝することもあるからであり、改めて仏教で説かれる無常が現実の事実であることを知らされた。

思えば、親鸞聖人や蓮如上人やその時代の人々は、飢饉や疫病による痛ましい情景を数多く目にしておられ、無常は現代より身近な感覚だったのではないだろうか。例えば親鸞聖人は多くの方が亡くなられたことを悲しみ、そして「生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしませうろう」(聖典六〇三頁)と述べられている。あるいは蓮如上人が「白骨の御文」で「朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり」(聖典八四二頁)と述べられ、また悲しみを表現されている。そこには悲しみと同時に、仏の説く無常が示されているわけであるが、今回、改めてその背景や時代状況を思い、それらの言葉が、真に身に迫る言葉であったことに改めて気づかされた。そして、その無常という事実の中で、親鸞聖人は「念仏もうすのみぞ」(聖典六二八頁)と述べられ、蓮如上人は御文においてひたすら教えに生き、教えを人々に勧めておられる。

確かに当時の飢饉や疫病については既に知識として知っていたことであり、今までも親鸞聖人や蓮如上人の教えを聞かせていただいていた。しかし、今回、ウイルスの流行を体感することによって、改めていかなる時、いかなる状態にあっても、ただ本願を信じ、念仏を申すことの重要性に気づかされている。

今後の予定

※新型コロナウイルス感染症の状況により、急遽内容を変更する可能性があります。

▼東本願寺日曜講演▲ (開会 午前九時三十分)

会場 しんらん交流館2階 大谷ホール

九月六日「いまに十劫とときたれど」

京都市下京区上柳町一九九 東本願寺北側

九月十三日「苦しむ親鸞」大谷専修学院院长 狐野 秀存

九月二十日(休会)

九月二十七日「親鸞聖人の人生観に学ぶ

—金子大榮先生に導かれて—

九月四日 龍谷大学名誉教授 龍溪 章雄

十月四日 解放運動推進本部嘱託 山内小夜子

十月十一日 大阪教区圓徳寺前住職 上場 顕雄

十月十八日 岡崎教区願正寺前住職 鶴見 栄鳳

十月二十五日 同朋大学仏教文化研究所 客員所員 脊古 真哉

▼高倉同朋の会▲

九月から新年度が始まります。

新会員を募集しています。是非ご参加ください。

年会費五千円(各回五百円)

日時 未定

場所 しんらん交流館1階 すみれの間

講師 難波 教行(教学研究所研究員)

テキスト 唯信鈔

会費 一回五百円

* * *

お問い合わせ先

『ともしび』の内容、「高倉同朋の会」について

教学研究所 〇七五-三七七-一八七五〇

『ともしび』の申し込み・支払い・発送について

東本願寺出版 〇七五-三七七-一九一八九